研究概要報告書 【音楽振興部門】

研究題目	日本近現代における大学合唱団の歴史的意義	報告書作成者	河西秀哉
研究従事者	河西秀哉		
研究目的	私は 2016 年に『うたごえの戦後史』(人文書院)を出版し、それを発展させた科学研究費基盤研究(C)「うたごえ運動の歴史学的研究」(2017 年度～2019 年度)において、戦後日本社会、特に社会運動のなかで展開されていたうたごえ運動に焦点を当て、その史料の収集と分析を行った。それらの研究を進めていくと、大学合唱団がこの運動のなかで大きな役割を果たしていることがわかった。そのため、大学合唱団が日本近現代史の歴史のなかでどのような活動を果たしてきたのか、それに関する研究を参照しようとしたところ、回顧の類しか見つからず、歴史研究において本格的な研究がないことに気がついた。 歴史学においては近年、社会運動の具体的な側面に関する研究が進んでいる。そのなかで、社会運動のなかでの文化的活動についても、検討がなされつつある。とはいえ、大学に関係する事項の研究は教育学の教育史のなかで検討される傾向にあり、歴史学のなかでは若干は触れられることはあるものの、本格的になされることがない。それゆえ、社会運動史や文化に関する研究は進みつつも、大学合唱団の歴史的意義については検討の対象外となってきた。 一方、教育学における教育史のなかでは、これまで大学制度に関する研究の蓄積がなされてきたものの、学生の実態、特に課外活動に関する研究は近年少しずつ進められてきたものの、それほど多くない。個別の大学年史で言及されることはあるものの、それぞれの大学合唱団がどのようなネットワークを有して活動していたのかはまったく検討されてこなかった。 そして音楽学における音楽史については、これまでプロの音楽家の活動に関する研究が中心で、大学合唱団のようなアマチュアの団体に関する研究は研究の対象外であった。しかし調べていくうちに、大学合唱団がプロの輩出元となっていたこと、またアマチュアながら近現代日本において音楽的にも大きな影響力を与えていたことがわかった。 近年、京都大学大学文書館に京大合唱団の史料が寄贈され、東海国立大学機構大学文書資料室に名古屋大学男声合唱団の史料が寄贈され、いずれも整理・公開がなされるなど、この数年間の間に各地の大学文書館で大学合唱団の史料が公開されるなどの状況が続いたため、史料に基づきながらこれに関する本格的な研究が可能になった。さらに、国立国会図書館の史料のデジタル化が進み、合唱に関する史料の検索がしやすくなったことも研究を進めようとするきっかけとなった。また、団塊の世代は大学合唱団に積極的に活動し、その後のネットワークも盛んである。この年代に聞き取りをするならば今が最適だと考えた。 以上のような問題関心と研究状況を踏まえ、様々な史料の博捜を通じて、日本近現代における大学合唱団の位置や意義を歴史的に考えることが本研究の目的である。		

研究概要報告書【音楽振興部門】

研究内容	近代日本においては、大学・専門学校などの高等教育機関が数多く設立された。キリスト教主義の学校ではでグリークラブが設立され、それぞれ積極的に活動を展開していった。これらのグリークラブからは作曲家の山田耕筰などの音楽家が生まれるなど、日本の音楽界に対して人材を供給し、それを支える存在であった。つまり、大学合唱団が、日本の音楽界、そして日本社会に大きな影響力を与えていた。さらに大学合唱団は、キリスト教主義の大学に限らず、帝国大学などでも設立され、学内の文化団体の中心的立場にあった。 アジア・太平洋戦争後、社会のなかでの文化活動が復活するなかで、新制大学においても多くの大学合唱団が復活・設立され、大学のクラブ・サークル活動の花形として、多くの学生が参加した。そして、大学における文化活動をリードする立場としての地位を確立していく。戦後の大学では学生運動が盛んで、社会運動や政治運動を積極的に行っていた。そうした運動の場では、参加者がみなで歌を歌って団結することが目指され、大学合唱団の歌が運動を盛り上げるなど、運動のなかで主導的な立場を担うこともあった。 その存在意義は大学内だけにとどまらない。その演奏会は大規模なホールで行われ、高度経済成長期には何千人もの観客を集めた大学合唱団もあった。演奏がテレビやラジオで放送され、レコードや CD として発売されることもあった。戦後日本の芸術・大衆文化を支える存在であったとも考えられる。 以上の問題関心に従い、戦前から戦後（具体的には高度経済成長終了時）にかけての大学合唱団に関する史料を網羅的に収集し、その分析を試みることを本研究課題の内容とした。近年、国立大学の大学文書館に大学合唱団に関する史料が相次いで寄贈され、公開されるようになった（京都大学大学文書館、東海国立大学機構大学文書資料室など）。まず、各地の大学文書館や私立大学の大学史資料室に所蔵されている大学合唱団関係の史料を調査分析し、それぞれの大学においてどのような活動がなされていたのかを明らかにする。その際、それぞれの大学の学生新聞などの調査も併せて行う。アジア・太平洋戦争後の大学における学生運動では大学合唱団が運動の主導的な役割を果たしていたとも考えられ、学生新聞にその活動の記述もあると考えられる。 また、音楽ホール関係など専門図書館などでも調査を行い、音楽雑誌や合唱専門雑誌・新聞などの関係史料の収集と分析を行った。また、一般の月刊雑誌・週刊誌や新聞などにも大学合唱団関係の記事は数多く掲載されており、書籍などの調査を含めて、国立国会図書館などでそれに関する記事を収集し、分析を行った。 古本屋には大学合唱団の演奏会パンフレットが数多く販売されているので、それも広く収集して、分析の対象とする。 そして、大学合唱団関係者への聞き取りを行い、大学合唱団のネットワークの様相を明らかにしようと試みた。特に、大学合唱団出身で作曲家として活躍する信長貴富氏からお話をうかがえ、氏の学生時代から現在までの理解できたことは幸いであった。 以上のような方法を採り、近現代日本における大学合唱団の意義・意味を解明することを本研究課題の内容とした。研究期間の前半に集中して史料調査を行い、後半は補足的な調査を進めつつ、学会発表・論文化の作業を進めた。

研究概要報告書 【音楽振興部門】

(/)

研究のポイント	・大学合唱団が社会との関係性を強く有し、それからの影響を受けるとともに、影響を与えていたこと(相互作用)。 ・それぞれの大学の活動だけではなく、地域を越えて、広いネットワークの下に展開されたこと。 ・その活動は社会にインパクトを与え、多くの観客を集める演奏会を開催するなど、人々が注目していたこと。 ・学生運動との関係性も強く、平和や民主化を求めるうたごえ運動との親和性も持っていたこと。 ・一方で、サークルとしての機能を有し、一緒に歌うことを求める学生も多かったこと。それゆえに多くの参加者がいたこと。 ・高度経済成長や大学紛争を経て、その存在意義について自ら問う機会が設けられたこと。 ・サークルなのか、運動なのか、芸術なのかをめぐって様々な討議の機会があったこと。 ・そうした歴史的変化を経て、現在の大学合唱団の状況が形作られててきたこと。
研究結果	史料調査とそれらの分析の結果、重要だと思われたのは、大学合唱団同士の横のつながりである。各大学において合唱団が結成されて運営されており、それらは単体で活動しながらも、大学同士で演奏会や様々な行事を通じて連帯を試みていた。当該期の学生運動の影響を受けている面も見られるが、単にそれだけで大学合唱団を運営し、連帯していたわけではない。そうした社会的な動向とともに、芸術的な側面をも重視して展開されていたのが、大学合唱団であった。しかも、各団員同士のつながり、それぞれの合唱団同士のつながりは友人関係・先輩後輩関係など、ネットワークが幾重にも複雑に展開しており、そうしたサークルとしての側面も強かった。いわば、社会的結節点としての大学合唱団という存在を見出すことができる。ここからは、戦後日本社会の特徴をも析出することができるようにも思われる。戦後直後から高度経済成長を経て、バブルとその崩壊、そして 21 世紀と経るなかで変化した日本社会のありようを、大学合唱団は体現していた。だからこそ、大学合唱団は様々な方向に影響力を有した存在であったと言える。
今後の課題	本研究課題で調査できた史料は、まだ一部にすぎない。それぞれの大学合唱団自体が所蔵している史料などを含めて、大学文書館や史料室などが存在していない大学の合唱団史料については調査をすることができなかった。そのため、本研究で扱えなかった大学合唱団の歴史を見れば、また違った展開もあると考えられる。 さらに、歌われた曲などの分析についても、より詳しく研究していくことも今後の課題だと思われる。演奏プログラムを見ていくと、時代時代によって変遷があることがわかる。それぞれの詩や曲の構造をも含めて丁寧に分析を試みることで、大学合唱団のその時期の傾向をより詳しく明らかにすることができるのではないか。 本研究課題の一部については、「大学合唱団の戦後史―うたごえ運動・大学紛争・高度経済成長―」(『昭和のくらし研究』22、2024 年発行予定)にまとめたが、この論文を起点に、今後、研究を進めていきたい。